

◆【海員随想】BISKRA号航海記(22)⑤ 新木繁雄

7月30日 フランス・セット接岸中

朝8時から揚げ荷が始まった。1ギャング(荷役人夫の単位)しかきていない、それもすべてアルジェリア人だ。したがって全員イスラム教徒だろう。ラマダン中は日中食事ができないし、水さえも飲んではいけないのだ。人夫が船へ乗ってくるとき、昼寝用のゴザを持ってくる。これではスムーズな荷役ができるはずがない。

一番気がかりだった修理屋は、9時頃に来た。打合せの後、材料や足場用具など取りにいったん帰ったが、すぐ持ってきた。工場は近いらしい。作業の足場を作り、船体に溶接する鉄片の型を取っただけで夕方になり、今日はこれで帰った。ちなみに作業員はフランス人だ。

造船所から封書が来ているが、なぜ自重で落ちないか、設計の方では現状が分かっていないようだ。こんな修理をいくらやっても良くなるわけがない。造船所の指示だから言う通りにやるけど。

昼少し前、マレーシアで積んだラワンの原木を陸揚げしようとしていたら、根元の中央の洞から20センチほどもある、大きくて真っ黒なサソリが一匹出てきた。もうすでに死んでいたけど、いかにも猛毒を持っていそうな感じで、大騒ぎになった。まだほかに生きているのがあるかもしれないと警戒して、人夫がみんな遠くへ逃げてしまい、寄りつかない。荷役監督がほかにいないことを確かめて、荷役が再開された。

工事の作業員が帰った後、昨日行った近くの海岸へ、海水浴に行ってきた。船へ帰ったら、船長が日本からの手紙や封書類を持ってきてくれた。日本のニュースから遠ざかっている我々には、手紙ほどうれしいものはない。1時間ほどかけて、隅から隅まで読んだ。前回横浜で、陣中見舞いに来て下さった高橋さんからは、その時の写真が同封してあった。

機関長が昨日、油屋に注文した潤滑油がきた。早速不足気味のツインクレーンに補給。約80リットルで2台とも満タンになった。

「海員だより」